

“非文字資料”と地域社会
——福島県只見町の民具保存活用運動——

佐野賢治
SANO Kenji

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム 研究推進会議
『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』 第 1 号 抜刷
2004 年 3 月 発行



“非文字資料”と地域社会

—福島県只見町の民具保存活用運動—

佐野賢治
SANO Kenji

遠き世の人らと幾日も在るごとく 煤のほへる民具を整理す

(福島県只見町黒谷地区 鈴木ハナエ)

I

本 COE プロジェクト「人類文化研究のための非文字資料の体系化」において第4班は「文化情報発信の新しい技術の開発」を担当することになった。この課題に対して、まず思い浮かべたのは、梅棹忠夫の情報社会論であり、その具体的実践である国立民族学博物館のあり方である。梅棹は、博物館は博物館行きの言葉で表される物の保存・管理・展示を主目的とする従来の博物館ではなく、物の持つ情報を社会に発信する“博情館”⁽¹⁾でなければならないという。国立民族学博物館は、情報機器関係方面に限ってみても世界でも例を見ないビデオテーカ（“自由選択式映像音響自動送出装置”，テーカはギリシア語で収蔵庫を意味するテーケーを語源とする）の開発を行うなど、非文字資料を素材に人類文化研究の成果を世界に発信する取り組みを行ってきた先進施設といえる。その民族学博物館建設の系譜の出発点には渋沢敬三の構想があった。今回の COE プロジェクトの基盤には渋沢が設立したアチックミュージアム、後の神奈川大学日本常民文化研究所に連なる80年以上にわたる図像・民具・写真映像資料に関する調査研究の蓄積がある。しかし、同じルーツを持つとはいえ、国家的機関である国立民族学博物館の活動をトレースすることは生産的な意味を持たないし、なによりも研究スタッフの人員や予算上からも不可能なことである。

渋沢は、“民具”資料の概念を世に問い、X線撮影を民具実測に試みたり、当時では最新の8ミリムービーカメラを使って民俗資料を映像化するなど今日から見れば資料学・文化資源学的な取り組みを先進的に行った。さらに、渋沢の資料論は非文字資料というだけでなく、膨大な水産史料の発見・整理など文字資料も含む総合的なものであった。その学問的背景には生物学的素養、生活事象を構造的、有機的総合関係で捉えるという、今日的に言えばホーリスティックな視点があった。また、渋沢は、学問の方法として“ハーモニアス・デベロップメント”の言葉に象徴される共同研究、学際研究を推進したのである。⁽²⁾

情報発信というと、大掛かりな情報機器やコンピューターソフトの開発などがまず話題にのぼる。しかし、渋沢の人間中心の総合的資料論、人的ネットワークによる研究の進め方がこのプロジェクトの共通認識として何よりも第一に必要と考える。一例をあげれば地域研究者との人間関係によって紡

ぎ出されてきた、『アチックマンズリー』の刊行、それを継承した『民具マンズリー』の双方向型の情報発信のあり方である。⁽³⁾ その延長線上に、インターネットの利用を位置づけるという考え方である。

いうまでもなくこのプロジェクトの主題は、非文字資料、文字に表現されない人間の諸活動を資料化し、体系化することであるがその基本姿勢として渋沢のこの精神を再確認しておきたい。第一に、文字資料もその視野に入れながら、人間の諸活動のあとに残されたすべてを資料と捉え、大きく資料のあり方から人間の営み、生活を追及することが可能であることを出発点とする。そこで1班から3班による図像、身体技法・感性、環境と景観、それぞれの資料の体系化の作業と共同しながら非文字資料を文化情報として発信するシステム、および新しい技法に習熟した専門技術者養成方法の開発を目指すことになる。第二には人と人の関係に基づいたヒューマンスケールの情報発信のシステム開発から始めることである。

このように第4班には、①文化情報発信のためのシステム開発、②博物館に勤務する高度専門職業人養成方法の開発という二つの大きな目標を実現するためのプロジェクトグループ的性格が強く要請されているが、この二つの目標の実現可能性を博物館展示や建設を結節点にして提示できればと考える。

そこでこの小論の目的は、一つには民具を实际使用してきた住民自らが民具の収集、実測、写真撮影、カード記入整理などを行った福島県只見町の取り組みを提示し、民具・民俗・文書・景観資料を民具使用動作・民具写真・実測図→民俗誌の裏付け→文書資料との整合→環境景観の変遷との比較（ダム建設以前以後）の作業を通し有機的に関連させ、山村の生活構造モデルを時間軸で提示、地域性の解明また地域振興のための情報発信をする資料化のあり方、博物館建設の方向性などについて考える。二つには、民具という非文字資料の保存・整理の住民運動、情報の発信のあり方が現在の地域振興・文化政策などに結びつく好例として紹介を試みる。

近代化の途次にあるアジア諸国の研究者の間では、廃棄されつつある民具の扱いや、その研究体制などについて、一方では最新の情報機器などを一気に導入しながらも、その一方では神奈川大学日本常民文化研究所の『民具マンズリー』などのヒューマンスケールの情報収集・発信の方法に身近なモデルを求めている。⁽⁴⁾ 会津只見の民具保存活用運動はこのような地域からの求めに対して、適切なモデルの提供、つまりは地域から世界に向けての情報発信となりうると思われるのである。

II

奥会津、只見町は一年の約半分が雪に閉ざされる山村である。江戸時代は天領、南山御蔵入地としての歴史を刻んできた。豊かな自然、特に水は電力資源として注目され戦後、只見川電源開発事業によるダム建設がこの山村に一大変化をもたらした。地域の歴史・民俗・自然の解説については、平成元年から始まり、平成15年で終了した只見町史本編・資料編に譲るが、この事業は町史の刊行をはじめ膨大な量の文書・民具・民俗・写真映像資料を後世に残すとともに、さまざまな波及効果を地域社会にもたらした。⁽⁵⁾

『図説 会津只見の民具』の刊行 公民館や廃校の寄宿舎に集められていた民具整理の開始もそのうちのひとつである。これらの民具は、高度経済成長期に農作業の機械化や家の改築で不要になり、また昭和44年の洪水被害や昭和59年のダム建設による村落移転の際、集められたものであった。平成2年度から作業に入った民具整理は、後に民具研究の学界で、只見方式と呼ばれるようになる、実際民具を製作したり、使用した本人が整理・記録する方式で行われた。90～40歳代の村人がボランティアで作業に当たった。古老たちにとってまさに日常卑近な物である民具の実測・カード化・整理収納の目標を、「孫子に教える」をモットーにおき、作業を進めたという。民具のほこり、汚れを落とし、計測し、ラベルを貼り、調査カードに記入する。農作業の実際を仕事着着用の上、農具を使うさまを不慣れなカメラで撮る古老の脇では、さらに年配の古老から苦労話などを聞く役が記録ノートに筆を走らせる、整理作業の一光景である。一年間で4417点の民具を整理し、その成果は、只見町史資料集第1集『図説 会津只見の民具』として平成4年に刊行された。何よりも、次世代に民具の製作・使用法を伝承しようとの意欲に裏打ちされた熱気その内容構成から伝わってくる。整理された民具は旧朝日公民館の収蔵庫・棚に整理され、カードは分類され教育委員会に収められた。

民具の実測図 民具を学術資料とするために民具の正確な実測は欠かせない。只見町では、神奈川大学日本常民文化研究所の民具実測講座の修了者である、星隆子が町の実情に合わせながら、学術的に通用する実測方法を「民具実測の方法」の手引きで示している(図1)。実測により民具を使用した痕跡、傷跡、磨耗など人の手を経たことを伝える意味があるなど古老にわかりやすい解説を附している。民具実測講座の手法が現地の実情に合わせて生かされている実例といえる。

民具の保存活用運動 住民自らの民具整理に対する取り組みはやがて町史編さん講座や文化祭などで町民の間にその理解が広まり、学校教育の現場では総合的学習の時間に民具の利用がなされるようになる。町当局も伝統文化伝承事業としてそのバックアップをする。民具の保存活用運動を推進し、その目標を国の有形民俗文化財の指定に定めた。活動の趣旨は、

- ①自分たちの民具は自分の手で残す→民具を使った人や作った人が自分自身で整理する。
- ②民具誌をつづる→自分の経験や知恵を孫子に教えるように記録する。
- ③民具保存活用運動を展開→行政と町民が一体となって保存と活用を推進する。

の三点にまとめられた。その努力が実り、平成15年には「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」として2333点が国の有形民俗文化財に指定された。只見町の民具保存活用運動は住民参加型の成功例といえるが、その背景には運動をする人(住民)、支援する人(行政)、導く人(学識経験者)の歯車がぴったり一致したところにある(図2)。

民具の保存活用運動に参加した地元の古老の感想を二、三紹介すると⁽⁶⁾、

「昔の歴史を知る事によって明るい未来が生まれると思う。特に民具を知るとは、現代文明の基礎を知ることである。20年前より明和地区では同士が集まって民俗を知る会を結成して民具の収集をした。寒いとき、暑いとき、電気もない、火もない所で民具の整理をしたことは、忘れられない思い出である。末永く民具を文化財として残したいと思う。」

(只見町・小林地区 梁取源左衛門)

「実測図」とは？

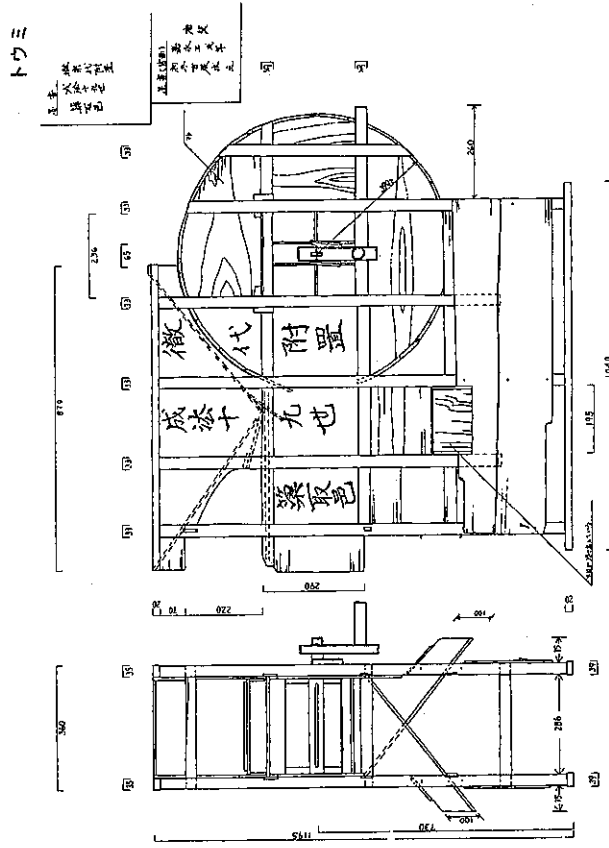
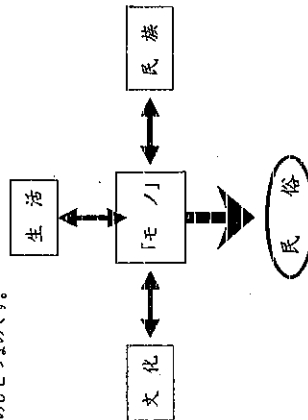
「実測図」とは文字通り「モノ」を実際には測して描いた図面です。機械製図の技法や規則を基にしてはいますが、設計図と違う点は、まず、「モノ」が存在していることです。

「モノ」の素材、形態、構造、技術等の情報を観察の上で分解し、寸法を取り、客観的データとして表現します。

- ★ なぜその「モノ」を必要としたのか
- ★ どのようにそれを作ったのか
- ★ どのようにそれを使ったのか
- ★ なぜその材質を選んだのか
- ★ なぜその意匠（形、模様）を選んだのか
- ★ なぜそのような構造を考えたのか

このような「人の心意」が「モノ」の背景にはあるのです。

現在、旧朝日公民館で行っている作業は、このような「伝承」を背負って今に在る「モノ」を学術的資料として残すための、実測図の作成です。そして、この実測図は、只見町の民具が「国重要有形民俗文化財」の指定を受けるために必要な資料のひとつなのです。



作図：星 隆子

図1 星隆子「民具実測の方法」より抜粋。

「民具とは、先人が自然の恵みに感謝し、自然の厳しさに耐えながら自然と調和しようとした知恵と技の結晶だと感じ、宝物のように撫でたくなります。」 (同・蒲生地区 馬場惇)

「私がこの世からいなくなっても、整理された民具は、ずーっと大切に保管されて、未来の人たちが展示されている民具を見たり触ったりすることでしょう。そして道具を使っていた人たちや整理をした人たちのことをどんなふうにも思うのでしょうか。将来、誰かがこれらから何かを学びとり、きっと役立ててくれるだろうと思いつつ、毎日楽しく仕事ことができました。民具整理にかかわれたことをとても誇りに思います。将来は、民具の展示される場所ができるのを楽しみに待っています。」 (同・小林地区 堀金正子)

民具に込められた情報を次世代に伝承（ここでは発信の言葉のほうがふさわしいかもしれない）していこうとの意志がどの文にもみなぎっている。巻頭の歌には、民具整理に参加した古老の気持ちがよく表れている。この運動の導き手である、福島県立博物館専門学芸員、佐々木長生は、

「只見町では、自ら使った体験を盛り込み、生きた知識をカードに記載している。このような方法で整理された民具には、多くの無形の民俗的知識が記述されている。すなわち民具を中心とした民俗誌・民具誌が作られているのである。参加された町民は、民具整理を通して、お互いに語り合い、またその勢いを次の作業に向けて楽しみながら作業を行っている光景も見られる。民具がとりもつ生涯学習運動といえる。こうした機運は、ひとつの運動にまで発展している観がある。すなわち、それが民具保存活用運動であり、民俗学研究の立場からも理想的な整理方法である。こうした方法が他の市町村、そして全国へ広がっていくことを望みたい。」

と只見方式の意味づけと、その情報発信と普及の必要性を端的に述べ総括している。⁽⁷⁾

III

只見町の民具保存活用運動の結果、現在まで、民具の実物は無論、7000枚に及ぶ記録カードが整理保存された。調査カードは体系的なデータとして学術性が高いとともに、その運動は町の文化振興にも大きな刺激を与えた。支援する側である町の文化財係長、新国勇は、町史編さん事業も含めて、

「自治体史が完成しても、すぐにこれといった効果が上がるものでもない。しかし、ムラおこし、地域再発見、観光案内、生涯学習、総合的な学習で、まっさきに必要なのは自治体史である。文化では腹はふくれないと言われるが、衣食足りて残るのは文化である。この知的財産に自治体がいかに投資するかで、その市町村の将来が決まってくるようにも思う。」

と述べ、⁽⁸⁾町史編さんの結果、積み上げられた資料の次段階の活用をさらに志向する。柳田國男が郷土研究、後の民俗学研究の目的として、郷土誌の編纂者に向けて書いた文の一節、「箇々の郷土が如何にして今日有るを致したか、又如何なる拘束と進路を持ち如何なる条件の上に存立して居るかを明らかにし、其志ある者をしてこの此材料に基いて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを⁽⁹⁾覚らしむる」ものでなければならぬとの一文を髣髴とさせる。只見町の民具保存活用運動は町史編さん事業も含めて、民俗学研究の科学的目的と実践的目的が結びついて展開しているといえるのである。

国指定の、自然物採集・水田耕作・焼畑・狩猟・川漁・山樵・製糸・蔓細工・屋根葺き関係など生

だけの博物館建設では意味がない。地域博物館が、住民にとって来し方を省み、未来を展望する判断材料の提供の場となるためには、そこから何を発信していくのかが問われる。

IV

非文字資料を、①対象化→②資料化→③データ化→④体系化→⑤公開化 と資料処理のすべての段階をソフト・ハードの両面から扱おうと考える今回のプロジェクトにおいて、文書・民俗・民具資料の資料化がその質的・量的な面からも理想的な形で整理されている只見町の資料のデータ化以降の問題について、われわれ他人者である研究者はどのような手伝い、協力ができるのだろうか。

民具資料のデータ化・体系化について言えば、民具分類総括表、民具目録を参考に分類項目番号から調査カードをデジタル・アーカイブ化する、また、写真・ビデオや図像で示された民具の使用と身体動作の関係をモーションキャプチャーで解析するなど最新の技法を駆使してデータ化する。さらに、図3で示されたような山村の生業・生活構造の中でそれぞれの民具を位置づける。近世の風俗帳(貞享2, 文化4)の図像や写真資料の入力処理により生業の変遷と景観の変化を跡付けビジュアル化する。これらの作業、また実現の可能性については情報工学の先生方に力を発揮してもらうことになる。

民具資料の展示・公開化については、私も調査に関係した職人巻物を例にしてみたい。⁽¹⁰⁾只見町を中心に南会津地方には、大工・屋根葺き・猟師など職人が所持していた巻物が多数残る。内容は職業の由来やその認可、祭の次第が主に記されている。所持しないと一人前の職人とみなされないために、大事に扱われ、今日でも上棟式などで用いられている。職人巻物自体が文字・図像で記され、その内容が民俗資料で跡付けられ、関係する民具資料が残るといように職人巻物をめぐっては資料が複合的に存在する。また、商人の起源を説く連尺の巻物、猟師に伝わる頼朝印を記す山立根元巻など(図4)、⁽¹¹⁾職人=非稲作・非定住民の動態から日本史の再構成を提示した網野善彦説の検証の場ともなる。⁽¹¹⁾何故、只見町に400巻以上の巻物が、それも多くの種類が分布するのかを主題にすると、一地域の職人巻物の展示を通して、日本の歴史に占める当地の位置づけ、また山村性という地域性の一端を解説できる。自身のムラが孤立した存在ではなく、常に時代の流れ、その時々外界の動きと連動していることを実感できる展示は、過疎化に悩む多くの山村にとって将来を展望する際、ひとつの示唆を与える情報発信になると思われる。また、現地での展示に加え、神奈川大学常民参考室での展示など、域外で公開化されれば、職人研究のもつ学術的意味は無論のこと、山村生活の暮らしぶりとその関係を都会の人に理解してもらうよい機会となる。地域の過去を知り未来に繋げる、“温故知新”のセンターとしての博物館のあり方は地域住民の意思に属する問題である。しかし、われわれ民俗学徒は“世間師”としてその地域にふさわしい情報、判断材料を提供し、ともに建設に携わることができるのではないかと考える。⁽¹²⁾

この小論では只見町の民具資料の保存活用の運動について取り上げたが、民俗学的な情報発信という、縣市町村の自治体史の民俗編、個人から学術団体による民俗誌などその数は膨大なものとなる。民俗情報の宝庫、文化資源ともいえるこの膨大な民俗誌の活用が、民俗誌作成はひとまずおき、問題にされなければならないと思う。民俗地図など図化により、その分布の意味などが議論されるこ

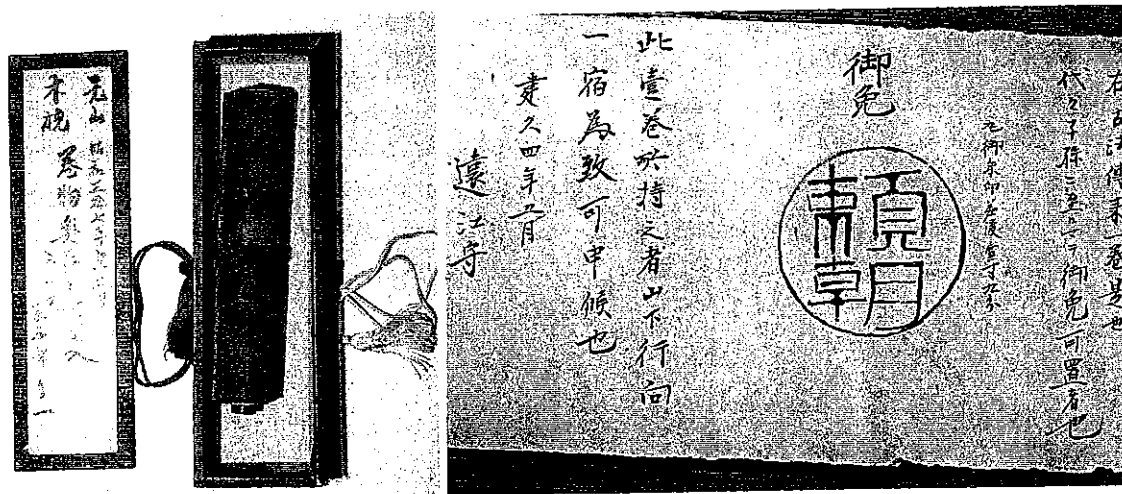


図4 左 元山・木挽巻物（叶津地区），右 『山立根元巻』（旧田子倉地区），只見町教育委員会提供

とはあっても、多くの民俗誌がその関係者にしか利用されていない現実には資料化やデータ化などどこかに問題点がある。昭和30年代に文化庁指導の下に行われた民俗調査はさまざまな欠点が指摘されながらも、その結果として、各県ごとの民俗誌・日本の民俗地図・民俗収蔵庫建設という目に見える形での情報発信が行われた。

本COEプロジェクトではどのような文化情報の発信ができるのか、大いに議論をしなければならない。ここではささやかではあるが、日本常民文化研究所の設立者、渋谷敬三の資料論、研究体制論の継承発展を意図した私なりの考えを示してみた。事例を与えてくれた只見町の関係各位、皆様にはこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。とともに、今後とも具体的事例をもって情報を発信する一地域として、民具保存活用運動の継続・発展を願うものである。

引用・参考文献

- (1) 梅棹忠夫「民族学と博物館」（著作集15巻，1990）、「情報と文明」（著作集14巻，1991）に梅棹の情報論、博物館論が収められている。
「博物館があつめるのは、ものだけではありません。ものにまつわる、あるいはものに直接関係のない、さまざまな情報こそは、博物館のもっとも重要な収集の対象であります。その意味では、博物館の“物”という字は誤解をまねきやすいので、むしろ博情報館、あるいはちぢめて博情報館といったほうがよい」（14巻496頁）
- (2) 横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所編『屋根裏の博物館——実業家澁澤敬三が育てた民の学問——』2002年
- (3) 佐野賢治「即民去私の人・河岡武春——民具マンスリーの周辺——」（『歴史と民俗』19 平凡社 2003年）
- (4) 周星「日本民具研究の理論和方法」2004年2月 中国・雲南大学における講演論稿。
- (5) 只見町史編纂室『只見町史』1-11 1992年～2004年、『会津只見の方言』（資料集5）やビデオ『小林早乙女踊り』など口承や民俗芸能方面についてもできる限り有効な資料化がはかられている。
- (6) 只見町教育委員会編『只見町の民具保存活用運動』（只見町民俗文化伝承事業報告書）2001年「みんなの一言」p.64-66より抜粋。
- (7) 佐々木長生「只見町の民具と保存活用」（『只見町の民具保存活用運動』2001年）p.33
なお、佐々木長生「古老たちの民具整理——福島県南会津郡只見町の事例——」（『民具研究』102 1993

年)も参照のこと。

- (8) 新国勇「計数管」(『河北新報』2001年5月31日総合版)
- (9) 柳田國男「郷土誌編纂者の用意」(『郷土研究』2-7 1914年)
- (10) 佐野賢治編『職人巻物の民俗学的研究——南会津地方を中心にして——』(科学研究費報告書)2002年
- (11) 佐々木長生「職人巻物にみる中世的風景——南会津只見町の事例から——」(網野善彦・石井進編『中世の風景を読む』1 新人物往来社 1995年)
- (12) 佐野賢治「最後の世間師——宮本常一論(1)——」(『民具研究』122 2000年)

(事業推進担当者)